みいけ附録

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町

新年特集号

職場で芽生えた眞の文学
集団の力でその芽を育てよう

戦争でない鉄帽の要る暮し

新年文芸の川柳の部で、一席に入選した〝正木　登さん〟の作品です。選者の評にもあるように、何と炭鉱労働者としての誇りにみちた川柳でしょう。

こんな秀れた時代風刺は、労働者の特性である明るい楽天性からのみ生れるものであろうし、炭鉱労働者の特権であるはずです。

それは

千尺の地下で秋刀魚を覗きあい

と、気楽に弁当をつつきあう仲間で

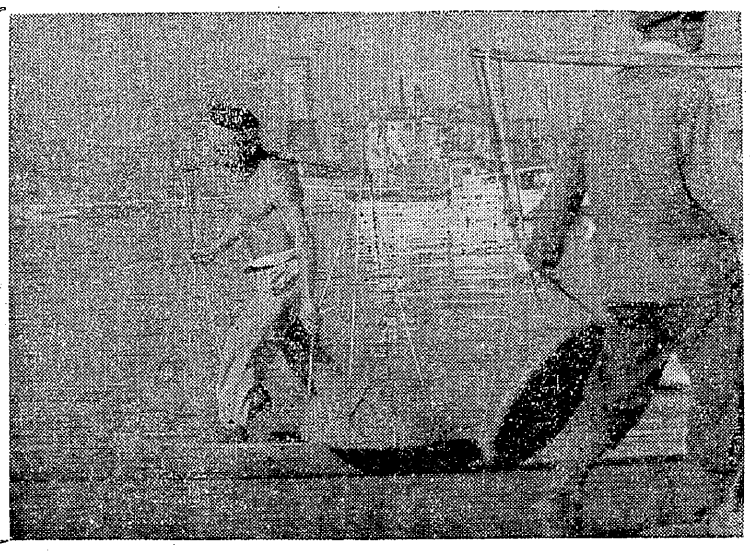
山鳴りへやはりドキンと二十年

と、二十年坑内で働いていても、おそろしいものはやはりおそろしい、血のかよつた人間の

一雨垂れは首を狙つたわけでなし

と、雨垂れにも〝首〟を感じるほどの、闘いの経験をもつている労働者のすべてがもつている特権だと思います。

私たちの文学は決してことむづかしく、頭でつくりあげるものでなく、労働者の苦しい生活や、きびしい労働の実感から生れてくるものであるはずです。



佳作「寒くない」　三川　長南　久太

今度の〝新年文芸〟には、創作一〇篇、詩二〇編、短歌一九五首、俳句三〇五句、川柳二三五句をはじめ感想文、児童つづり方など数多くの作品がよせられ、そのなかから選ばれて入選した作品は、すべて働くものの、生活と労働の実感にうらづけられた、たしかな作品です。

しかし、選にもれた多くの作品のなかには変にとりすましたり、労働者の血の通つていない作品や、あまり高級でない自己満足で気どつた作品など、既成の文学に毒されたものが少くありませんでした。つまり、いまの三池の文学活動の実態は新しい芽がめばえている段階で、それもまだ組織化されていない、ばらばらの恰好での芽ばえのようです。

その新しい芽は、歴史の流れをゆがめようとする反動諸政策との闘い、職場でのはげしい職制との闘いなど、闘いによつてつちかわれている新しい人間の目と心を基礎に芽ばえているのです。

そこで、いま三池の文学活動に必要なことは、新しくめばえている〝芽〟を組織することだと思います。

例えば三川支部で文学誌「坑」に結集している文学サークルがあり職場活動家を中心にして新しい文学活動がすすめられていますが、このように闘いのなかから芽ばえた、人間の芽を、文学の芽を集団の力で育てあげていく必要があると思います。

闘いにあけくれた一九五八年でした。その闘いを通じて私たちは前進してきたのです。

そして闘いのなかで新しい年を迎えました。

今年も私たちはかぎりない前進をつづけるでしょう。

闘いのなかで働く者の魂はきたえられ、嵐のなかで人間の心は美しくなつていくからです。

闘いのなかでめばえた〝芽〟を大切にし、働くものの文学をそだてましょう。

〝文学は闘いの武器です〟

編集部長　境　孜

入選発表

◈創作
一席「運命の鍵」　三川　岡浦　益実
二席「ごきぶり」　三川　如月ちかし
三席「晩酌」　潜務　若松　沢潭

◈詩
入選作なし
佳作　宮浦　高むく竜生
〃　三川　長本　勇
〃　宮浦　中西　長輝
〃　四山　久保田和昭
〃　製作　松田　義光

◈短歌
入選　三川　樫本　国義
〃　宮浦　山西　光一
〃　製作　藤本　盛登
佳作　製作　江上　輝広
〃　宮浦　中西　長輝
〃　三川　宮崎　天馬
〃　三川　中尾　種夫
〃　製作　永松　運造
〃　宮浦　永野　草平
〃　三川　木村　守
〃　四山　平田　山路
〃　本所　永吉　謙也

◈俳句
一席　製作　内田　人
二席　四山　藤木凡世を
三席　四山　蓮尾　四郎
佳作　宮浦　高むく竜生
〃　宮浦　前原　貞美
〃　宮浦　荒金　酔太
〃　宮浦　中西　長輝
〃　四山　北園　静草

◈川柳
一席　三川　正木　登
二席　宮浦　森田　二勇
三席　本所　堤　雨穂
佳作　三川　外山あきら
〃　横田　静子
〃　三川　横田　質
〃　宮浦　山西青蛙子
〃　宮浦　中西　長輝
〃　宮浦　平河十四男
〃　三川　四山　馬場　久元

◈感想文
入選作なし

◈写眞
佳作　三川　長南　久太
〃　三川　長南　久太
〃　白仁田　稔

◈児童つづり方
一席「わたくしのあさ」　二年　ばば　きみ子
二席「えんそく」　一年　今村くにとし
三席「コロ」　四年　佐伯　裕子
佳作　一年　加藤ゆきよし
〃　一年　山西　きみ子
〃　四年　加藤　良一
〃　三年　中西　輝雄
〃　四年　今村　光子
〃　六年　山下美智代
〃　六年　今村　政広

短歌　渡邊順三選

入選

三川　樫本国義

炭壁の脆弱地帯に身は置きて怯えつつ急ぐ枠張り作業

交渉の経過を告ぐる分会長の声は深夜の繰込場に透る

充されぬ交渉経過に憤りおさえてうたう行動隊の歌

深夜業の疲れを云いて寝につけば霰混りの空に鳴る風

背をむけてねむれる妻と腹這いてうたかく吾と灯の暗き部屋

いささかの譲歩は見せず対決の深夜の繰り込み場に燃えろストーブ

交渉は決裂せしまま座り込む低音階の歌ひびかせて

宮浦　山西光一

一点となりて坑口見えくれば泣きたきまでに陽を恋い昇る

あかあかと夕日が壁を照らす時掛けし坑衣の汗臭いくる

二番方より帰りし我に敷き呉るるふとんはいまだ陽の匂いする

天盤の激しく鳴りて切るる日は無性に空の青さが恋し

地下足袋の爪先痛し枕木の炎熱の上炭車押しゆけば

水筒の茶をのみつくし切羽より湧く地下水を腹這いてのむ

製作　藤本盛登

一生を鋳型作りに終るのか熔鉄の匂い胸深く吸う

静かなれど力満ちいる工場に始業の前の電気燈黒し

ものなべて黒き工場に出鋼の鉄はあかるき輝きをもつ

作業衣に着替うれば湧く優越感今日は歯車の鋳型を作る

平凡に熔鉄に親しみて十八年鋳型作り来しは才なきゆえか

警職法反対署名の鉛筆をにぎる吾が手にしみしマシン油

佳作

製作　江上輝慶

ピケ配置おわりて倚れる鉄柵にからみて枯れし朝顔があり

五屯炉を傾けてとりべに湯を入るる湯は跳ねて黄色き火の粉散らせり

並べある鋳型につぎし熔鉄の上り溢れて砂に炎たつ

熔接の光ひらめく一所かこいして暗き下屋に入り来ぬ

宮浦　中西長輝

おのずから汗にじみくる地熱有り軒ける咽喉に鳴るは炭の粉

暗黒の坑内は昼夜をわかたねば発破待つ間をねむ気催す

坑出でし刹那まぶしく吸う外気甘いと誰れかいう声がする

感傷のふとおそいくる我に耐えて飯ふき上ぐる釜の辺に立つ

三川　宮崎天馬

配電函担いだ凝りをたんねんにもみくるるかさかさの要のあかぎれの手

ざつくりと石炭すくうローダーの快調音が切羽に響く

連結のベルも確かに初炭車捲くホーリングの力強きうなり

岩壁を繰るサク岩機の騒音へ帽灯信号くり返し掘る

三川　中尾種夫

山鳴りの音の荒きに默しいて四十二キロのカツペをつなぐ

東京に行きたいという子の願い雨の切羽でふと思い出す

負傷せし友の重さによろめきつつ障害物多き斜面を急ぐ

石炭掘りに慣れし身なれど晴れし日は流れる雲にも心残しぬ

製作　永松運造

打ち始めし三屯ハンマーの震動が広げし図面につたわりて来る

熱ありし要のつくれる弁当を持ちて霜置く道に出でたり

疲れつつ夜業終りて帰る道わが額を打つあらき雨つぶ

灯の消えし舗道すぎ来て振り返えるうしろより吹く風にある意志

宮浦　永野草平

炭壁の壁も妖しく抽象の絵に似て滴る帽灯の輪の中

逸走の炭車のがれて待避場に粒たつ肌の汗を拭いぬ

坑外の引込線を出て行く石炭貨車に雪降り積る

三川　木村守

日本一坑内電車と誇る記事よむ減員さるる職種のわれが

完備なり押し出され来る大形車減員さるる職種の不安

坑口に完備なりたる巨姿を置きオートメーション鉱車我らも威圧す

四山　平田山路

いつの日か炭山を去らんと秘めていし五〇のぞみも潰えゆくらし

ボーナスのことを幾度もくり返えし尋ねいし老父（ちち）いつかね入りぬ

一日に陽の目見ること二時間もあるかなしかの坑内づとめ

本所　永吉謙也

君が病む窓の灯（あかり）のみ消されて漆黒の闇はそこに吸わるる

倒れ伏す深田（ふかだ）の稲をたんねんに農婦は刈れり泥にまみれて

貧農の上にいくばくの潤いあらむ豊年祭りのハヤシきこゆる

近詠五首

渡邊順三

庭の木の枝を鳴らして過ぎゆきし夜半の風ありその音寒し

小賢しき傍観者の批判ききおりて口喝きくるいらだたしさなり

民衆の嘆きの声もきかずして政治の悪は止まる知らず

あばかれゆく汚職は永山の一角にて腐れ果てたる政治は憎し

突然の死に襲われても悔なきかと問いつめて吾はややにたじろぐ

選後に

渡邊順三

今回の作品には非常に優秀なものが多く、選者としても大いに張合いがあつた。とくに入選の三氏はそれぞれに特徴があつてすぐれている。

樫本国義氏は闘争に取材していてそれが概念的にならず成功している。山西光一氏の歌は職場の日常を感覚的にとらえていて、柔軟なじよ情味がある。そして炭鉱労働者としての切実な実感にあふれている。藤本盛登氏の歌は自己内省的な歌で、その点に特色があるこれをもつと深めてほしい。

佳作の江上、中西、宮崎三氏は入選作にくらべてほんと遜色がないといつていい。江上輝広氏の二、三、四首目は鋳物場の躍動する光景が如実にとらえられていて印象に残る歌である。中西長輝氏の一首目、三首目は炭鉱に働く人でなくては味わい得ぬ実感である一首目がとくにすぐれている。宮崎天馬氏の一首目は働くもの同士の夫婦の情愛があふれている。あとの三首も明るく健康で力強い。

このほかの人々にもそれぞれすぐれた歌があつたが、一々触れるスペースがないので省略する。

一般に職場の歌は頭打ちの状態にあるといわれている。それは同じ職場で、同じ経験を歌うのだから、自然誰の歌も同じようになり類型化して新鮮味がなくなるからである。その弱点を克服するためには、できるだけ視野をひろくしそして自分という人間を深くみつめ、自己追求をするどくしてゆくことである。そこから個性的な特色もでてくると思う。

固定的な概念にとらわれず、あくまで自分の感情、感覚で歌うことが何より大切である。とにかく今回はすぐれた歌があつてうれしかつた。次回にはさらに期待を大きくしている。

× ×